

Pitchari ~ピチャリ~

七飯町歴史館だより

第189号

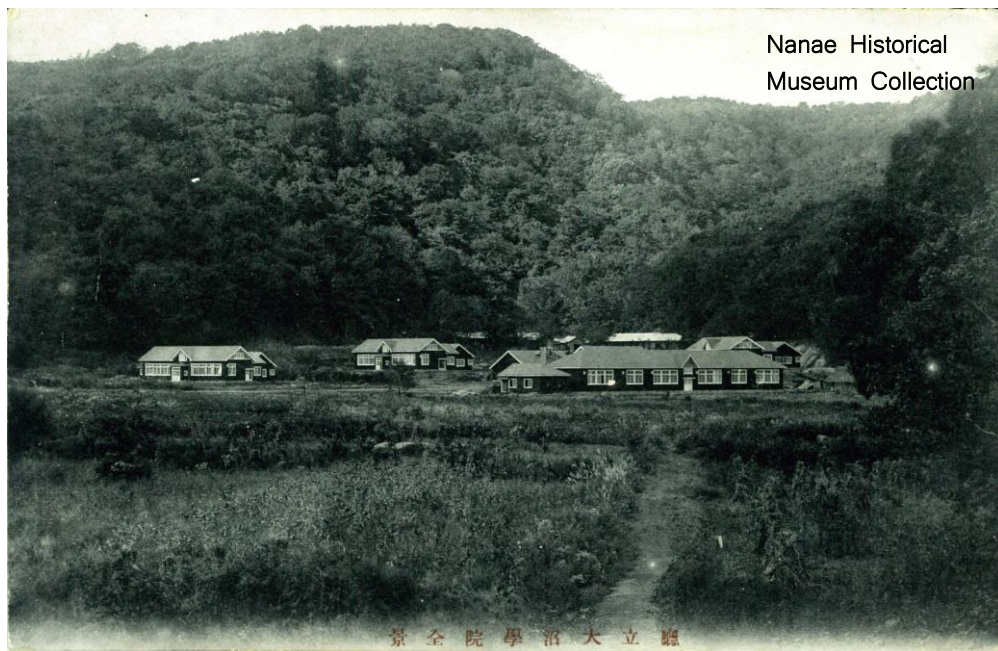
ななえ古写真物語 VOL.189

閑静な学び舎

北海道立大沼学院全景

大正13年頃

大沼地区



閑静な別荘地にも見える上の写真は、大沼の一面に設けられた学校の様子を写したものである。

明治終わりごろ、函館在住の篤志家の間で不幸な青少年たちを保護し、育成するための施設を作ろうという動きが始まった。明治44年に、イギリス宣教師のタブソン、函館病院長の横山軫、函館商業学校長の神山和雄などの熱心な提唱により、函館区長や函館支庁長、財界の名士、宗教家など50名内外の人々が協議して、函館区有志団体の事業として経営することとし、創立委員11名を挙げて事業を推進させた。

翌年2月3日には、函館商業学校で創立発起人総会が開かれ、施設の名称を函館訓育院とすること、院規則、財団法人とすることが決議された。また、2月10日には同じく函館商業学校で評議員が開かれ、訓育院長に渡辺熊四郎が、幹事には三坂亥、宮崎松太郎、金沢彦作、望月日謙、伊藤松太郎の5名が選任された。

施設の所在地については、特殊な教育であることを考慮し、閑静で景色の良い場所として、小沼にあった鳳の湯跡地が選ばれ、院生室、職員室、食堂、事務室、教室、家族舎、講堂、応接室、小使室、物置、収納室、厩舎といった建物が設けられ、外部への交通は専用ポートを使わなければならなかったという。

収容児童は、8歳から14歳未満の非行行動が顕著な者や不良行為をなす恐れのある者、家庭の事情により一緒に住むことができない者としたが、家族の希望があれば16歳まで、場合によっては20歳まで所属できた。また、入るには家族、警察、市町村長の申し出だったり、警察署長の進言などによってなされ、北海道庁長官の命がなければ入院できなかった。ちなみに大正2年時の院生は8名、昭和9年には約80名にもなったという。

授業は訓話、読方、算術などが午前中に行われ、午後は実科として畑作業が主で、そのほか服や手袋、家具、スキー等を作らせそれらを販売し社会貢献に資した。また院生は四つの家族舎に分かれて入り、職員夫婦が家族舎の長となり寝食を共にして家族的に生活した。

函館訓育院は、大正4年以降、感化院（児童自立支援施設）に指定。大正13年には北海道庁に移管され北海道庁立大沼学院と改称。さらに昭和56年に北海道立大沼学園と改称した。また、収容児童への教育機会の提供のため平成21年には、学園内に七飯町立大沼小・中学校 鈴蘭谷分校が開校。令和2年、大沼小・中学校が統合したため、分校は「七飯町立大沼岳陽学校鈴蘭谷分校」と改称した。学園内に学校がある複雑な状況ではあるが、大沼学園は、今も大沼の地で子どもたちを育てている。

3日 夜の博物館。

「伊能忠敬と福島町」と題し、福島町教育委員会学芸員の鈴木氏を講師にお迎えし、古文書や古地図、日記などの文献を用い、まずは、東京は千住から始まった第一次測量ルートを詳しく解説して頂きました。箱館に向かうはずの伊能忠敬がなぜ福島町に流れついたか。それには「風」が大きく起因しています。とにかく風に翻弄されます。他に箱館での測量の手続きも一週間かかったことや、昼と夜の測量の方法の違い、健脚を示す逸話などあっという間に過ぎた深い時間でした。



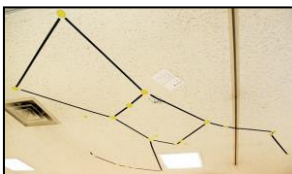
22日 ジュニア探検クラブ

「今までの体験発掘の中ではとても面白い」と言ってもらった子どもたち。お世話になった大船J遺跡の担当の方と作業員の方に道具の使い方を習い、土と格闘。遺物は出なかったのですが、掘った土を上手に一輪車で運ぶことも褒められ、「一日二千円でやるよ！」という提案も出ました。発掘の次は史跡大船遺跡を見学し、帰館後は「萱が吹いてあった住居はなぜ涼しいの？」などの質問も出ました。



小さな施しと気づき

テーマ展が終了しました。今回の展示では、床に実物大の葉の切り紙、天井には、星座を形どって貼りました。身近な樹木の葉の大きさや、夜空に瞬く星座の形を探してもらえたらと企画しました。星座はあまり気づいてもらえていない印象でしたが、今後の展示でも小さな驚きや発見を表現していきたいと思います。「あっ！ほしだ！！」と天井を指さす女の子にお父さんは「どこ？」。そんなやりとりにほのぼのする場面もあり、うれしく思いました。



1	日
2	月
3	火
4	水
5	木
6	金
7	土
8	日
9	月 スポーツの日
10	火
11	水
12	木
13	金
14	土
15	日
16	月
17	火
18	水
19	木
20	金 ピチャリ第190号発行
21	土 ジュニア探検クラブ
22	日
23	月
24	火
25	水
26	木
27	金
28	土
29	日
30	月
31	火

※10月の休館日はありません

ヒヨドリとリンゴ

見本園のリンゴをヒヨドリが啄む。爆竹と蚊取線香を利用した装置を試している。まだこの闘いは続きそう。



編集後記 ~tawagoto~

何年前かに八戸ブックセンターを訪れた。ここは市職員が所長を務める直営の本屋。本好きなら実に居心地の良い空間だ。偶然の一冊との出会い、無くしてしまった本との再会。カンズメブースという書くことに集中できる小部屋には、机、椅子、Wi-Fiが完備しており、魅力的な書齋だった。時間を忘れ、ゆったりと過ごせる、自治体が運営するこんな書店のある街は、人と本との出会いをそっと後押ししてくれる存在だと感じた。

~ピチャリ~
Pichari

第189号

令和5年9月20日発行

七飯町歴史館

〒041-1193 亀田郡七飯町本町6丁目1-3

電話 0138-66-2181 FAX 0138-66-2182

E-mail : rekishikan@town.nanae.hokkaido.jp